国府石器群の南下に伴う関東の技術的変容
－千葉市鷲谷津遺跡出土のナイフ形石器から－

橋　本　勝　雄

はじめに

国府石器群とは、瀬戸内技法を背景とした国府型ナイフ形石器を保有する石器群であり、千葉県も当該石器群の影響下にある。

筆者は、白井市一本桜南遺跡出土のナイフ形石器（雨宮・落合1998）に触発され、当該石器群の研究に着手し、これまでその成果を若干紹介してきたが（橋本2016・2017）、昨年度に当財団が開催した出土遺物公開事業の準備作業の中で、新たに重要な事実に遭遇した。今回紹介する千葉市鷲谷津遺跡のナイフ形石器がそれである（白井ほか2002、千葉県教育振興財団2018）。

筆者はこの出会いを僥倖と捉え、その後、広く東日本全体の中で関東の技術的な位置づけを検討してきた。その結果、当該資料をはじめとする本県の関連資料は、国府石器群の南下に伴う関東の技術的な変容を考察する上で重要である、との結論に達した。

ついては、本稿において当該資料の再検討を踏まえ、国府石器群の関東への波及の様相と石器群の変容に言及し、これまでの研究成果の一端を披歴したい。

１　千葉市鷲谷津遺跡とその類例（第１図）

⑴　鷲谷津遺跡の石器（第１図１）

鷲谷津遺跡は千葉市中央区千葉寺町の台地上に所在し、千葉寺地区遺跡群の一角をなす。本遺跡群は鷲谷津遺跡、地蔵山遺跡、観音塚遺跡、中野台遺跡、及び荒久遺跡の５遺跡の総称である。昭和60年度から平成11年度に土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、その結果、旧石器時代～近世の遺構・遺物が発見された（白井ほか2002）。このうち旧石器時代については、立川ロームⅣ下・Ⅴ層の石器群が注目されており、今回紹介する資料もその時期の関連資料である。

当該資料（長さ5.0㎝・幅2.4㎝・厚さ1.2㎝、重さ11.36ｇ）は、立川ロームⅣ層から単独で出土した。基本的な特徴は以下のとおりである。

① 素材は底面を有する横長剥片（以下、「有底横長剥片」（平口1987））である。底面は打撃の方向が主要剥離面と直交したポジティブな剥離面、左側縁中央に残された素材剥片の先端部はヒンジ・フラクチュア（以下、「ヒンジ」）を呈している。刃角は35°、調整角（整形加工の中点と主要剥離面のなす角度）は55°を測る[1)]。

② 剥離面のパティナの新旧の差から、二段階の整形加工が見て取れる。

・整形加工は、まず右側縁に施され、これによって一側縁加工のナイフ形石器に仕上げられている（第１段階）。

・次に、上下両端に細かな再加工（網点）が施され、尖頭器状に手直しされている（第２段階）。

③ 石材は、柴田徹氏により東北頁岩（比重2.57、報文「珪質頁岩」）との鑑定結果が得られている。

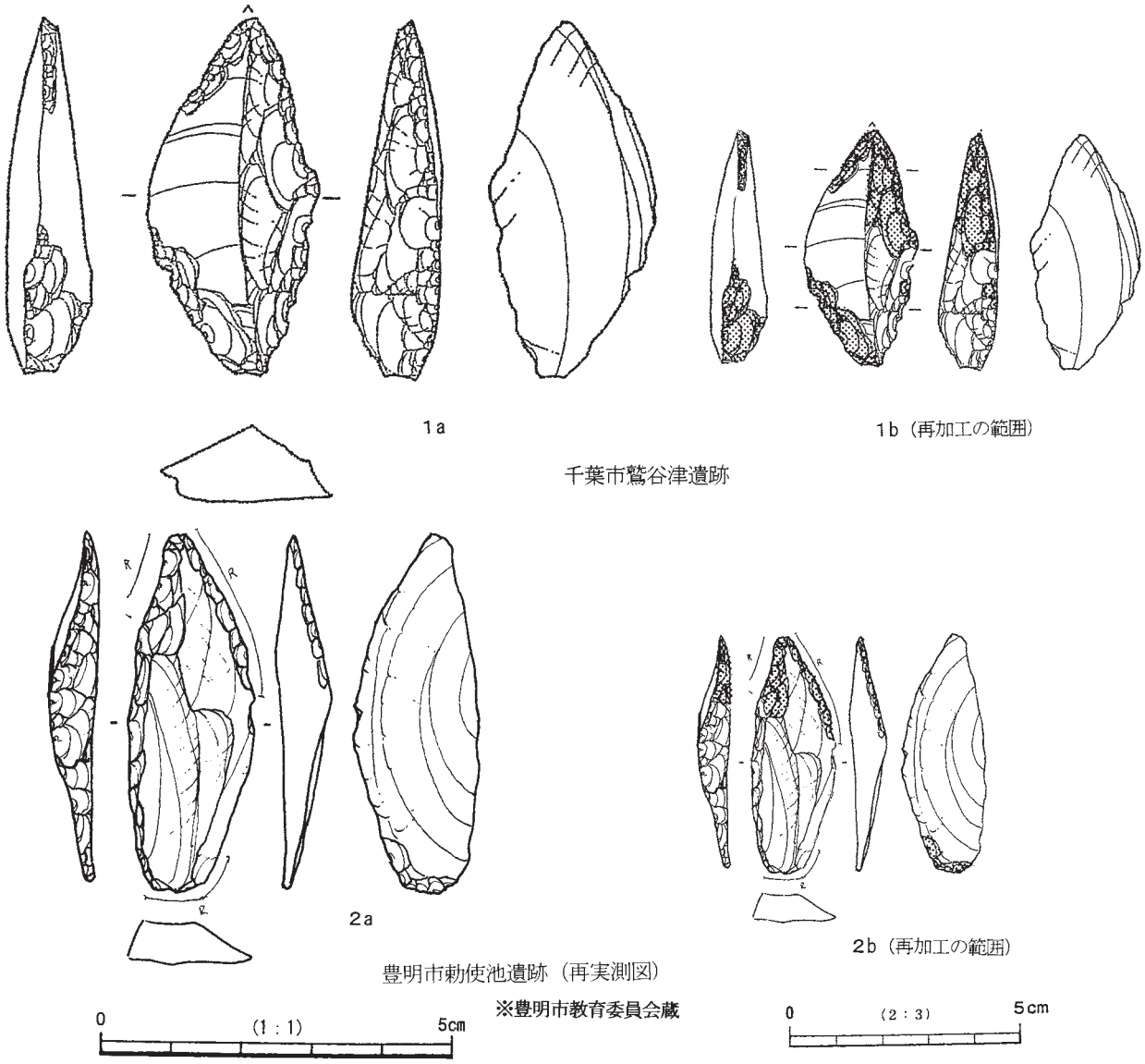
なお、鷲谷津例は最終的に尖頭状に整形されており、かつ、わずかに残された素材の縁辺が（刃物に不適当な）ヒンジであることから、その機能的性格は、切截具というよりも刺突具と推定される。

⑵　勅使池遺跡採集の石器（第１図２）

東日本において、鷲谷津と同様の再加工例としては、愛知県豊明市勅使池遺跡採集のナイフ形石器がある（齋藤2002）。

本例（長さ5.1㎝・幅1.2㎝・厚さ0.6㎝・重さ5.57ｇ、刃角30°・調整角70°）は、翼状剥片を素材とした典型的な国府型の純正品である。石材もサヌカイトを使用しており、搬入品の可能性が高い（齋藤2002）。当初は一側縁加工のナイフ形石器であったが、その後、さらに上下両端に細かな加工（網点）を施し、上部を尖頭器状、下端部を平らに整形している。このような再加工の在り方を考慮すれば、右側縁下半部に刃部（フェザーエンド）を残置しているものの、鷲谷津例と同様に、刺突具としての機能が想定される。

鷲谷津例と勅使池例は、地域はもとより石材も異にするが、ともに国府石器群の周辺地域に位置する。また、最終形態もさることながら、遠方から搬入された製品の有効活用という点でも共通している。



第１図　千葉市鷲谷津遺跡と豊明市勅使池遺跡の再加工例

２　千葉県内の国府系石器群（第２図）

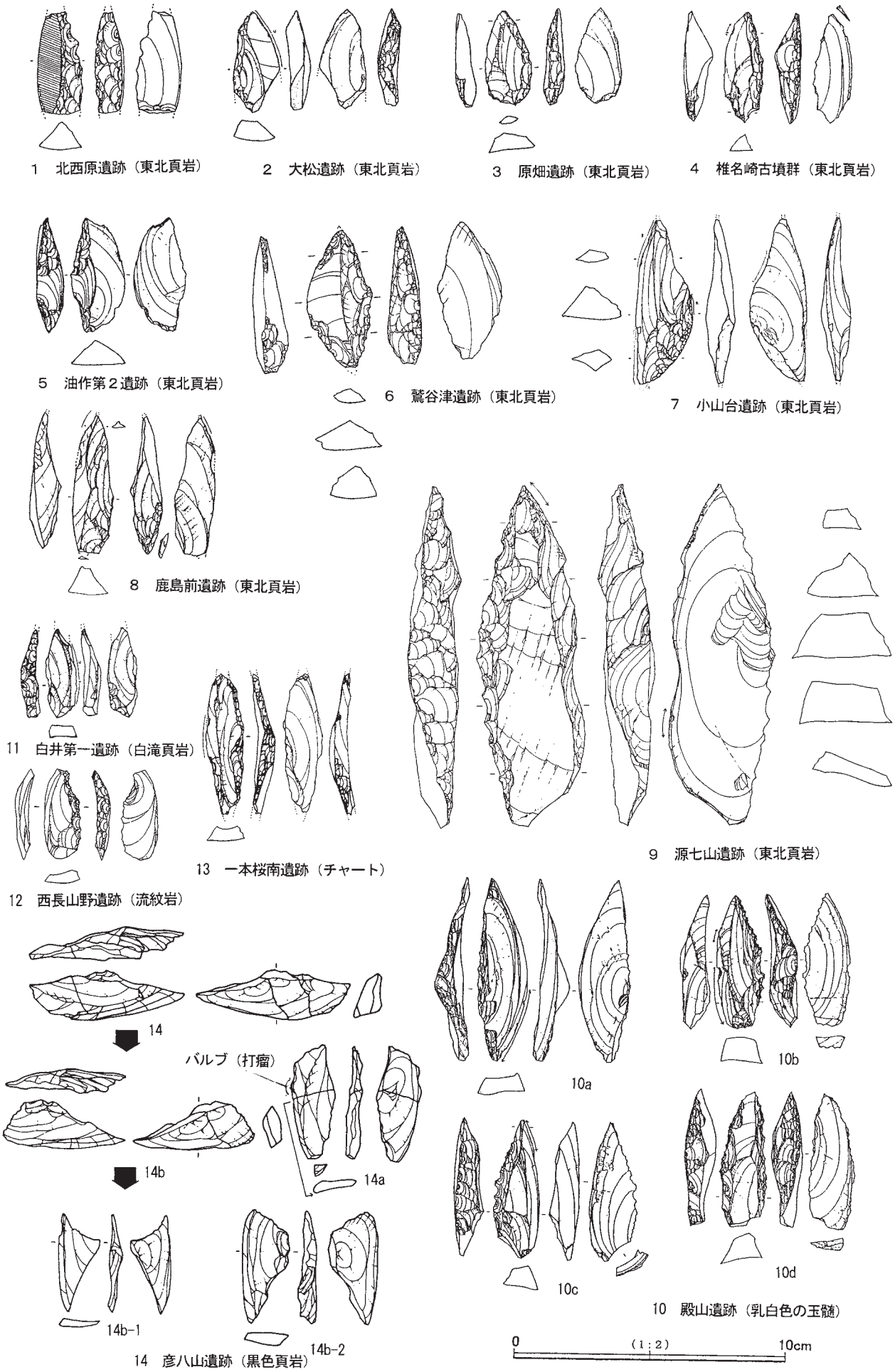
県内における関連資料としては、これまで、柏市大松遺跡（橋本2016・新田ほか2018）・原畑遺跡（新田2015）・小山台遺跡（橋本2017・西川ほか2019）、印西市一本桜南遺跡（雨宮・落合1998）、白井市白井第一遺跡（鈴木1978）、松戸市彦八山遺跡（田村・小林1987）、船橋市源七山遺跡（香取・榊原・新田2006）、千葉市椎名崎古墳群Ｂ支群（白井ほか2006）、市原市鶴牧遺跡（田島2010）、我孫子市鹿島前遺跡（石田1979）、印西市油作第２遺跡（村山ほか1985）、山武郡横芝光町西長山野遺跡（太田・矢本1992）が報じられている[2)]。

ただし、その多くは本来の国府型というよりも国府型に類似の有底横長剥片素材のナイフ形石器（以下、「国府系」）と考えられる。また、出土状況に関しては、総じて単独母岩ないしは単独出土例が多い。

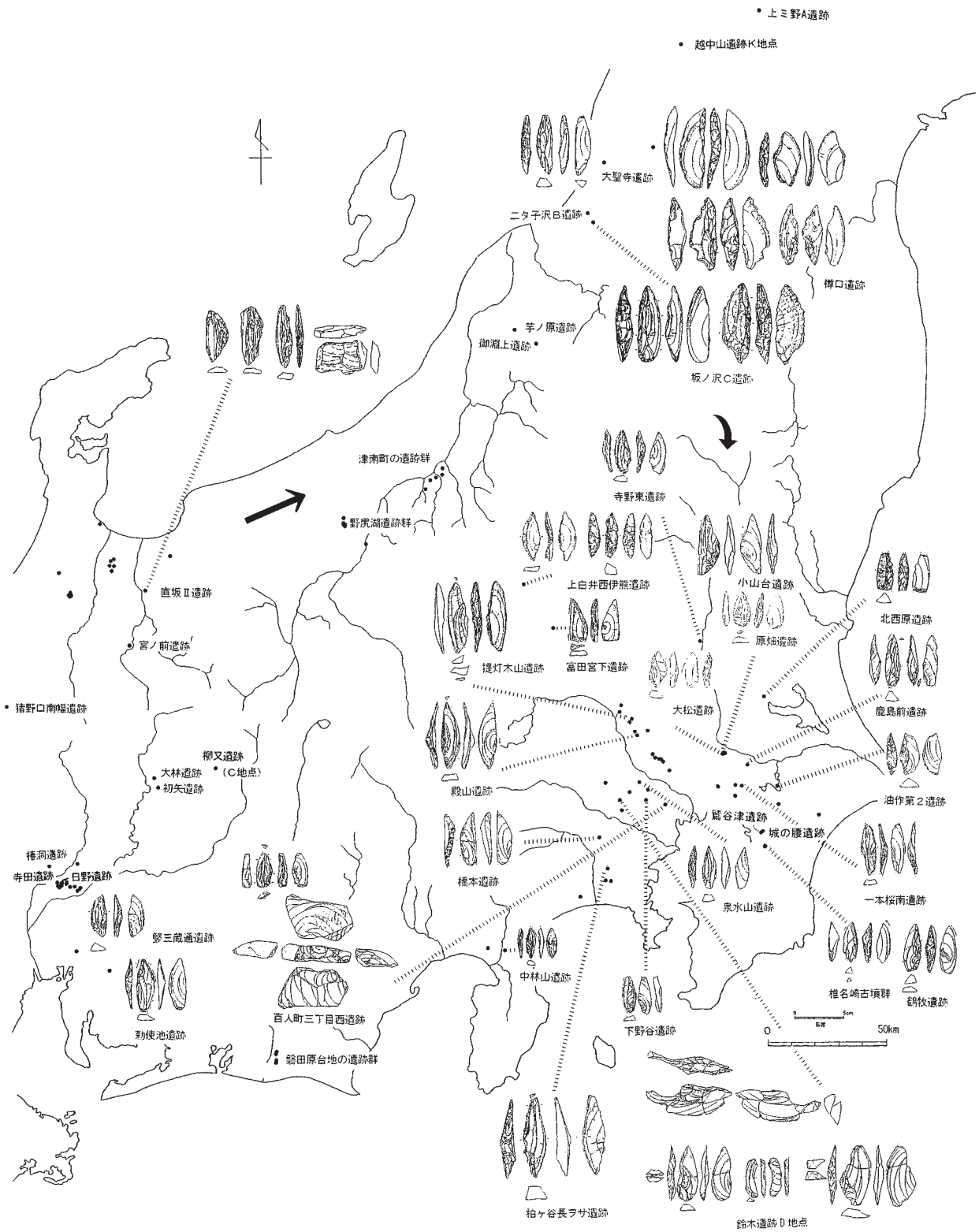
石材は、東北頁岩（鹿島前、原畑、大松、小山台、鷲谷津、油作第２、椎名崎古墳群Ｂ支群、源七山）が最も多く、チャート（一本桜南）、黒色頁岩（彦八山）、流紋岩（西長山野）、白滝頁岩（白井第一）等多岐にわたる。

これらは基本的に搬入品であり、かつ翼状剥片の生産に関わる資料は皆無である。大松例をはじめとした遠隔地石材の東北頁岩製は、まさしくそのあらわれといえよう。

なお、本県に隣接する茨城県土浦市北西原遺跡（第２図１）でも国府系（長さ3.6cm、幅1.6cm、厚さ1.4cm、重さ6.5ｇ）の出土（報文は「二次剥離剥片」）が報告されている（比毛ほか2004）。本例は、後世の遺構覆土から出土しており、一側縁加工でその加工技術は新潟県村上市樽口遺跡のナイフ形石器（立木1996）にみられるような対向調整剥離となっている。底面は節理



第２図　古利根川以東の検討資料（遠隔地石材：１～10、千葉県内：２～９・11～14）



第３図　東日本における国府系石器群関連遺跡分布図（橋本2017を一部改変）

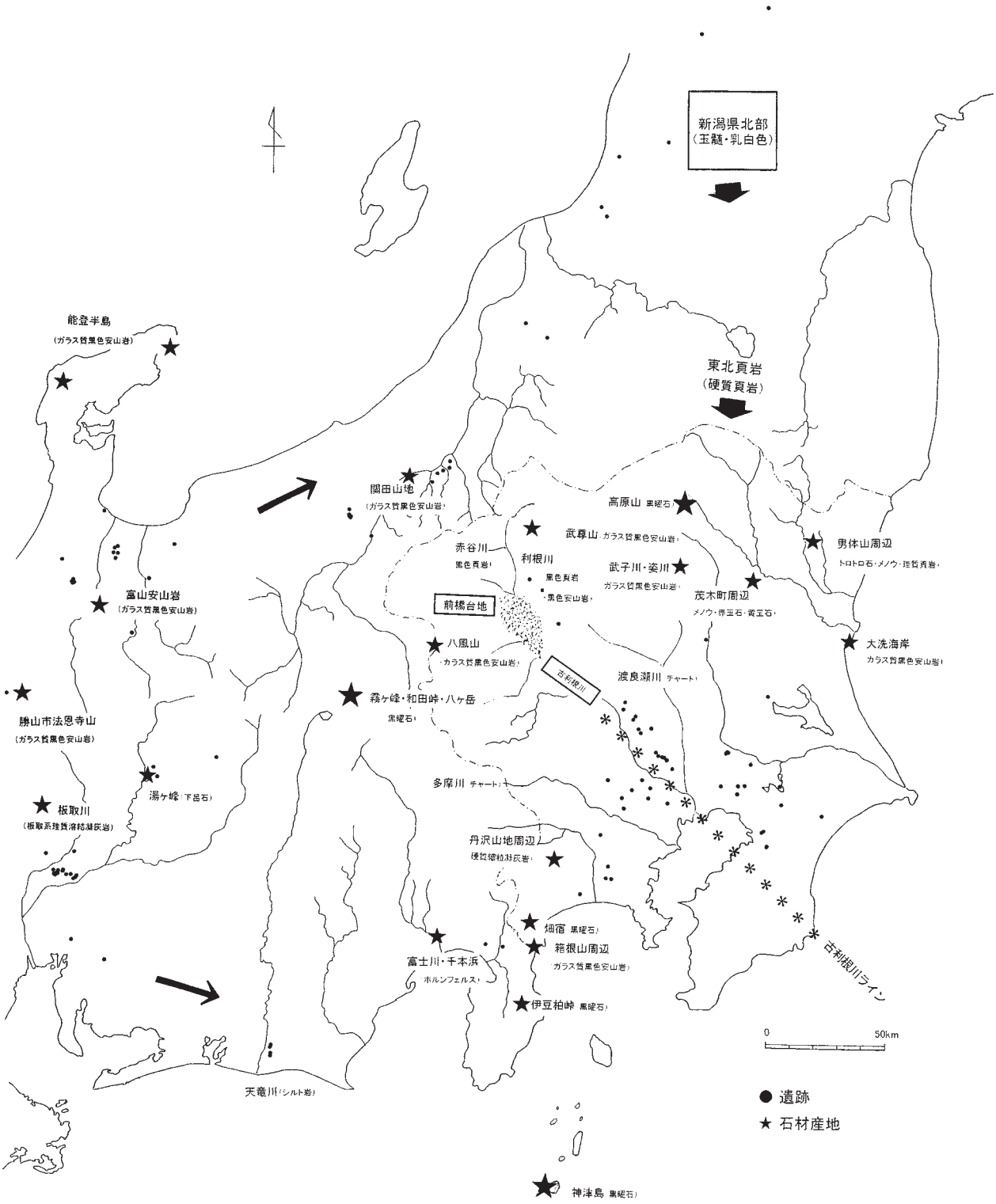
面で、刃部はフェザーエンド。刃角は55°で上下両端が欠損している。石材はチョコレート色の東北頁岩である。

３　関東の地域的変容

⑴　国府石器群の分布（第３図～第５図）

西日本から東日本に至る国府石器群の一次的な波及については、日本海側では山形県（越中山遺跡Ｋ地点ほか）、太平洋側では静岡県西部（静岡県磐田市匂坂中遺跡群のサヌカイト製翼状剥片石核や広野北遺跡における瀬戸内技法の存在）が、その限界といえる。

瀬戸内技法は材料のロスが多く生産性が低いという

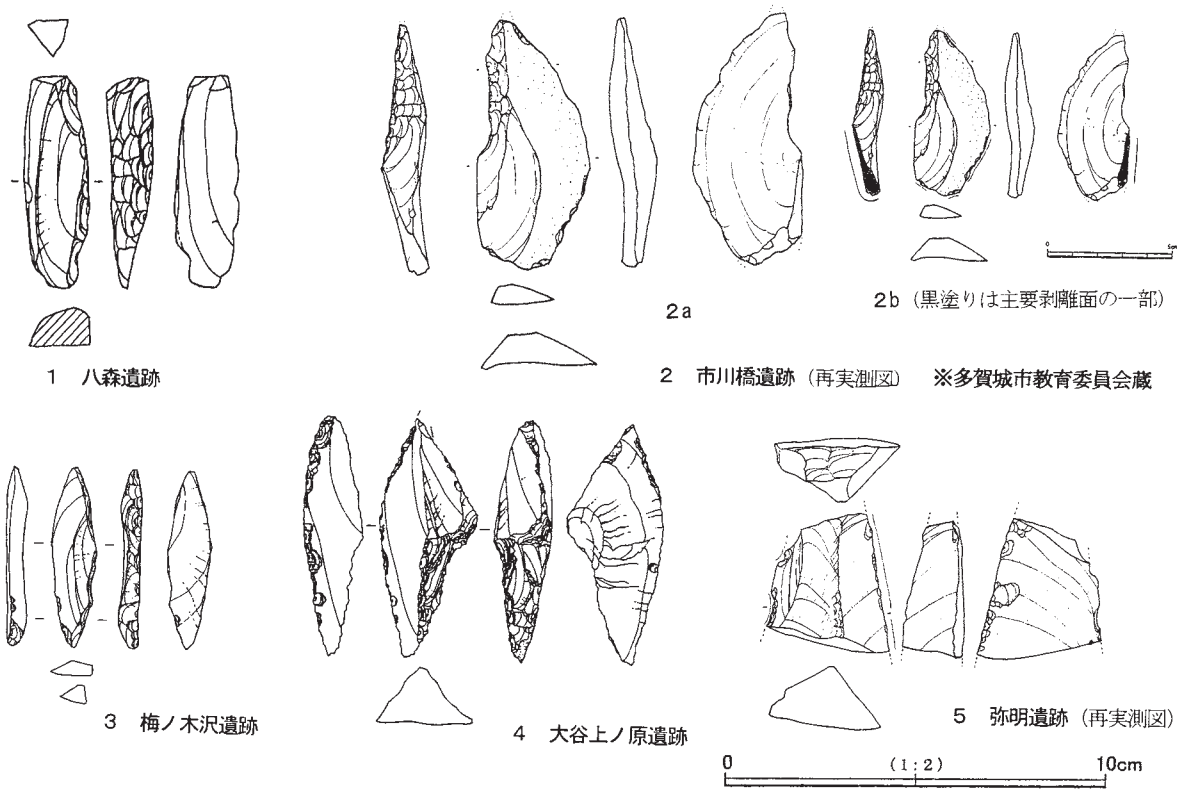


第４図　東日本における国府系石器群関連遺跡の分布と石器石材の交流

固有のマイナス面をもっている。一枚の盤状剥片から生産される翼状剥片は数枚といわれており、しかも二次加工の段階で、しばしば垂直割れが生じ、最終的に完成に至るのは僅かである[3)]。さらに剥片を石核の素材として使用するために大型の原材を必要とする。勢い安山岩系や下呂石等の、大型石材が潤沢な原産地で発達する傾向にある。

それゆえ分布域内では、各地で石材の原産地を単位とした集団のネットワークが形成されており、特にサヌカイトに似た剥離特性を有するガラス質黒色安山岩の産地が卓越している[4)]。

一方、関東では、大型の原材の入手が可能で、しか



第５図　再検討を要する資料

も相応の特性を持つ石材は群馬方面の黒色安山岩にほぼ限定される。このことについては、会田容弘の「良質で十分な大きさの石材が供給されにくい関東地方では、国府型ナイフの素材となる翼状剥片が常時剥離できるような石材環境にはなかった。それが国府型ナイフの希薄な分布の原因である。」との見解に関連づけられる（会田1994）。

鷲谷津遺跡の所在する関東では、主として南関東の相模野台地、武蔵野台地、大宮台地及び下総台地に関連遺跡が分布し、北関東では二、三の事例にとどまる。微視的には、大宮台地の西縁および武蔵野台地東部の古利根川（荒川）沿いに集中する。

南関東では、国府石器群の技術的影響下で成立した国府系石器群が出現し、有底横長剥片を素材としたナイフ形石器が多数発見され、そのなかに少数の国府型が搬入品として介在している。このような搬入品は、後述するように、山形・新潟方面から、会津方面を経由して、南関東にもたらされたものと推定される。また、国府型の一次的な南下（ダイレクトな影響）は、森先一貴も指摘したように、古利根川（現荒川筋、第４図の「古利根川ライン」）をもって途絶える（森先2011）。このように北回りの遠隔地石材製のナイフ形石器の一次的な波及は古利根川までであるが、これに対して、古利根川以西に所在するナイフ形石器は在地石材を用いる傾向にある。このような遺跡の分布状況からは、北方系細石刃石器群と同様に古利根川を境として遠隔地型と在地型が対峙する状況が見て取れる（橋本2012）。また裏を返せばこのことは、北方系細石刃石器群と同様に太平洋側の静岡県西部から南関東に至る西回りのルートが無かったことを物語っていよう。

なお、先学の引用例のなかで、国府型ないしは国府系とされたものとして山形県酒田市八森遺跡、宮城県多賀城市市川橋遺跡、福島県郡山市弥明遺跡（安斎2004）・楢葉町大谷上ノ原遺跡（門脇ほか2017）、及び静岡県駿東郡長泉町梅ノ木沢遺跡（麻柄2011）がある（第５図）。しかし、これらについては、実見等によりその認定に疑義が生じたため、この際、事後の研究への影響を考慮して、以下に筆者の観察結果を記した上で、遺跡分布図から除外したことを明記しておく。

◆八森遺跡（報文「調整剥片」PL78-215）　この資料（長さ5.6cm・幅1.6cm・厚さ1.1cm・重さ12.0ｇ、東北頁岩製）に限っては、実見していないので断定はできない。しかしながら、実測図では、背面（底面・ネガ面）と腹面の剥離方向が互いに逆方向になっており、これ

をもって国府型と認定することには無理がある(佐藤・大川2003)。

◆市川橋遺跡第27次調査（報文「ナイフ形石器」第二分冊第248図212B）　横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器（長さ6.6㎝・幅2.9㎝・厚さ0.9㎝・重さ14.47ｇ）である。剥片の先端(正面右側縁)はフェザーエンドを呈しており、先端・基部はガジリにより破損している。報文では底面は主要剥離面と同一方向の剥離面となっているが、筆者の観察によれば、剥離面ではなく平滑な自然面（他の面に比べ黄色味を帯び風化顕著）と判断される。また、裏面の右側縁下部に主要剥離面の一部（黒）をとりこんでいることから、石核の素材は背面に自然面を大きく残す大型剥片であり、素材生産の際にはその主要剥離面を打面としていることがわかる。左側縁には顕著な整形加工（角度約50°）が施され、刃部にあたる右側縁には、細かく断続的な刃こぼれないしは二次加工が観察される。石材は東北頁岩（「珪質頁岩」・「硬質頁岩」）ではなく灰色に風化したサヌカイト様のガラス質黒色安山岩である(千葉ほか2004)。当該資料は、報文で表現されたような翼状剥片を素材としたナイフ形石器ではないが、東北頁岩製の石刃石器群が支配的な東北地方の石器群中では異質の感があり、今後注意すべき資料といえよう。

◆梅ノ木沢遺跡第Ⅳ文化層６号遺物集中（報文「ナイフ形石器」第82図96）　今回検討資料の中では唯一のブロック内出土例である。報文には、「ホルンフェルスの横長剥片を素材として、剥片の末端部を刃部に、打面部分にブランティングを施して一側辺加工のナイフ形石器としたものである。加工により打瘤部分が除去されている。」(笹原2009）とある。出土層位はＡＴ直下の第二黒色帯（ＢＢⅡ）で、ホルンフェルス製の大型石刃を含む６号遺物集中から出土している。大きさは、長さ4.8㎝・幅1.2㎝・厚さ0.5㎝・重さ3.08ｇで、石材は地元産のいわゆる「富士川ホルンフェルス」(柴田2002)である。当該資料については、報告書の刊行後、麻柄一志が「ＡＴ下位の国府型ナイフ形石器という稀有な例」で「近畿地方ではＡＴ下位においても横長有底剥片石器群に国府型ナイフ形石器が含まれることがあり、近畿地方の瀬戸内系石器群の東への拡散が波状的だった可能性を示唆している。」(麻柄2011）と述べ、その資料的価値を高く評価していた。もしも、これが事実ならば稀有な事例ということになるが、実見の結果、背面の剥離面及び主要剥離面の剥離方向は横方向ではなく、すべて縦方向であり石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器であるとの否定的な結論に達した。この観察結果は、一方で大型石刃を基調とする当該文化層の石器群の様相とよく調和する。どうやら東日本においてはＡＴ下位の資料は、今のところないようである。

◆大谷上ノ原遺跡（第５次）　大きさは、長さ6.4㎝、幅2.5㎝、厚さ1.5㎝、重さ14ｇを測り、東北頁岩製である。一側縁加工で切出形を呈し全体的な形状は国府型に近いが、実見の結果、素材は翼状剥片ではなく石刃石核の稜形成の作業面調整に関連する横長剥片と推定された。また、報文では、底面の剥離方向は主要剥離面と同一方向とされていたが、斜交ないしは直交方向であることも判明した。なお、先端には衝撃剥離(彫器状剥離)、上半部に摩耗痕・光沢がみられ、これに角錐状石器に近い分厚い断面形を加味すれば、本例の機能的性格が国府系と同様に刺突具であることは疑問の余地がない。ただし、「結果オーライ」(形態重視）という意味では、大谷上ノ原例も国府系としてもよいのかもしれない。

◆弥明遺跡（報文「縦長剥片」第82図８）　結論から言えば、当該資料は横長剥片ではなく、二次加工のある石刃ないしは縦長剥片と認定される。右側縁に節理面（剥離面)、左側縁には稜形成を示す横方向の剥離面がみられる。これら二つの剥離面は中央の長軸方向の剥離面によって切られている。上下両端が折損しており、左側縁には不連続で細かな二次加工が施されている。大きさは長さ3.6㎝・幅3.1㎝・厚さ1.6㎝、(重さ不明）で東北頁岩製である。

⑵　南関東の技術構造（第６図）

技術特性　瀬戸内技法が石材のロスが大きく大型の盤状剥片を石核の素材とすることから、その実現には原石の相応の大きさと量的保証、及びサヌカイトに似た剥離特性が要求されることは既に述べた。

これに加えて、南関東では国府型のナイフ形石器も大半が搬入品（単独母岩）であり、極めて数も少ないことから、翼状剥片の現地生産は当初から目指していない。

およそ南関東では、立川ロームⅣ下・Ⅴ層段階の技術基盤としては横剥ぎが支配的となるが、特に剥片素材の石核からは、有底横長剥片が生産され、国府系の素材に供されたようである。有底横長剥片が生じる基本的な条件については、①石核の素材が盤状剥片を基本としていること、②打面が水平ないしは一方にやや傾斜しており、無調整であること、③作業面が小口（側

面）及びその周辺であること、④横剥ぎにより石核の一部が底面として取り込まれることなどが挙げられる。

その結果、生産された有底横長剥片の形態は多様性に富む。さらに有底横長剥片の生産を含む石核の剥離方向には一定の規則性がなく打面転移も頻繁であるため有底横長剥片にとどまらず無底横長剥片も多数生産されている。そのため有底横長剥片の生産技術は、瀬戸内技法とは異なり、総じて便宜的で規格性に乏しい技術と言わざるを得ないのである。このような技術基盤と「殿山技法」は無縁ではない（織笠1987）。端的に言えば、「殿山技法」は、技法として成立するほどの組織的、かつ体系的なものとは言い難いのである。ついては、今後は関東における有底横長剥片生産技術の形態的多様性を念頭に置きながら、「殿山技法」に替わる何らかの言い換えを検討したい。

さて、南関東の資料の中では、第６図に掲げた東京都新宿区百人町三丁目西遺跡の石核（谷川ほか2001・有本2004）と同小平市鈴木遺跡Ｄ地点の接合資料（角張1989）が有底横長剥片生産の痕跡を示す好例に位置づけられる[5)]。

前者は、かつて有本雅己によって翼状剥片石核と認定されている（有本2004）。もしも、これが事実ならば南関東では、唯一の事例といえ、その資料的価値は計り知れないが、残念ながら、過去三回にわたる実見の結果は、氏の見解と大きく異なるものであった。その詳細は第６図（２a・２b）を参照されたい[6)]。

後者については、すでに拙稿（橋本2017）で紹介済のため詳述は避けるが、三国技法（平口ほか1984）のように打点を左右に振幅・後退させながら有底横長剥片を生産しており、当時の剥片生産技術の代表例のひとつといえる。

ちなみに、埼玉県朝霞市泉水山遺跡出土のナイフ石器（古田1988）は、鈴木Ｄとは同一石材・同一形態であり、互いに技術面における密接な関係性を窺わせる。泉水山例（第６図上段右上）は二次加工の度合いが著しく素材の復元が困難ではあるが、南関東では翼状剥片石核や翼状剥片の存在が無という状況証拠から、鈴木Ｄのような技術基盤を背景とした可能性が浮上する。すなわち鈴木Ｄのナイフ形石器の加工が進めば、泉水山遺跡とほぼ同形のナイフ形石器が出現するものと推定されるのである。

以上のように、南関東では周辺地域ならではの技術的な変容を遂げている[7)]。このことを端的に言えば、有底横長剥片を素材として国府型本来のイメージを残しつつ、製作工程よりも結果重視の便宜的な製作技術に変化しているといえよう。その背景には、石材の小型化やヒンジを生じやすい剥離特性に順応した技術的な工夫があるが、このような在り方は、石材原産地で発達した瀬戸内技法の対極にある。

⑶　関東の石器石材（第４図）

石材構成　関東全体の国府系の石材については 、東北頁岩（硬質頁岩）、玉髄、黒色頁岩、ガラス質黒色安山岩（利根川系等）、黒曜石、チャート、凝灰岩、珪質頁岩、凝灰質頁岩、流紋岩質凝灰岩、流紋岩、白滝頁岩、ホルンフェルス（計13種）が報じられている。数量的にはガラス質黒色安山岩、凝灰岩、黒色頁岩、黒曜石が多いが、ガラス質黒色安山岩・黒色頁岩は主として群馬・埼玉・東京、古利根川沿い、凝灰岩は相模野台地、黒曜石は大宮台地に遺跡が集中する。このうち黒曜石については信州系が主体であり、その他の産地については伊豆系が相模野台地や箱根・愛鷹山麓に散見される程度である。全国的には安山岩系との結び付きが強いことが指摘されているが、どうやら関東は異なるようである。

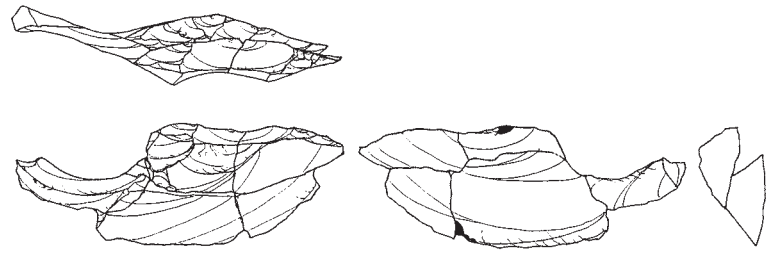
二大製作地は大型の原石の確保が容易な群馬県・神奈川県であるが、地域外に搬出されておらず、それぞれの地域内に留まる。また、一方で他地域からの製品の搬入は確認されておらず、地産地消の傾向にあり、総じて地域性が顕著である。

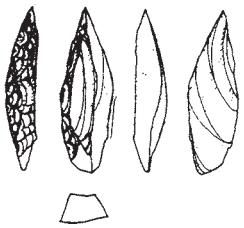
製品の流入　関東では、相応の石材環境にあった群馬方面では本来の技術が行使され国府型の在地生産に至っている。これに対しては、南関東の関連資料には遠隔地石材製の国府型ナイフ形石器の搬入（「外来的性格」）と瀬戸内技法に触発された国府系の有底横長剥片製ナイフ形石器の生産等の類似の技術の登場（「内在的性格」）という二つの側面がみられる。

南関東の多様な石器石材の中で外来的な性格を帯びたものとしては、東北頁岩製と乳白色の玉髄製の二種がある（橋本2017）。

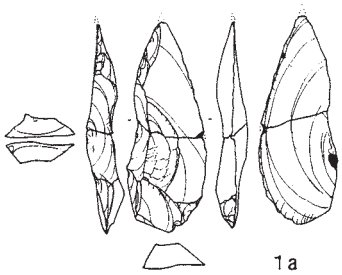
東北頁岩製については、先述したように茨城県土浦市北西原遺跡、千葉県柏市大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡、我孫子市鹿島前遺跡、船橋市源七山遺跡、印西市油作第２遺跡、及び千葉市鷲谷津遺跡・椎名崎古墳群Ｂ支群、玉髄製については埼玉県上尾市殿山遺跡が挙げられる。東北頁岩製については、このほかにも未報告のものがあり、今後も千葉県の北西部を中心として良好な資料の出現が期待できる。

東北頁岩製の製作地については、石材原産地と関連



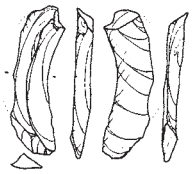


《参考》泉水山遺跡（珪質頁岩）



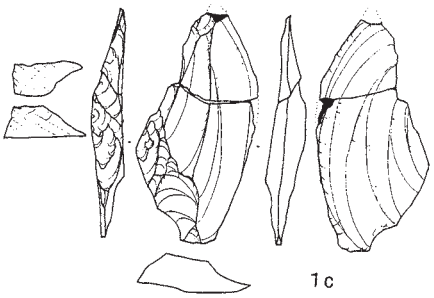
1a

→



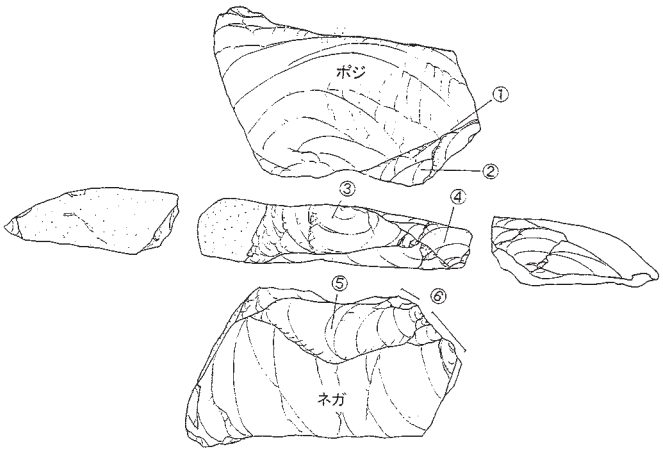
1b

→

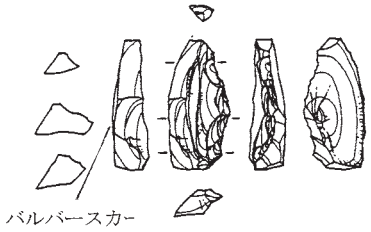


1c

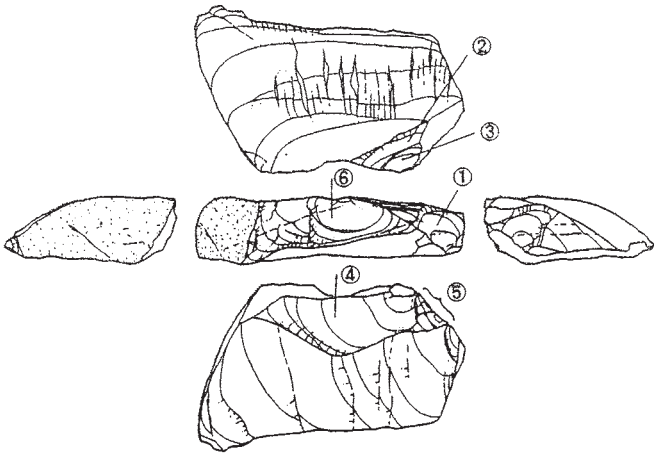
1　鈴木遺跡Ｄ地点（珪質頁岩）の接合資料（橋本 2017）



2a　（再実測図）



2c　有底横長剥片素材のナイフ形石器



2b　（有本 2004）

2　百人町三丁目西遺跡の石核と国府系ナイフ形石器（丹沢系緑色凝灰岩）

0　（1：2）　10cm

第６図　有底横長剥片製石器の製作に係る南関東の代表例

遺跡の分布域を勘案すれば、新潟県北部かもしくは山形県内に所在したことはほぼ確実である。

一方、乳白色の玉髄（「半透明の頁岩」）の産地については、阿部朝衛（阿部2013）、中村由克（中村2004・2008）及び柴田徹（柴田2004）による野外調査の結果や考古遺物の多寡から、その産地は、新潟県北部方面が想定される。また、この付近では東北頁岩と玉髄とのセット関係が現象化しており、先の資料の石材構成との相関性がみられる。

以上の新潟県北部の状況に加えて、火山災害による群馬方面との断絶（関口2008）、及び古利根川以西に偏る遺跡分布を考慮すると、遠隔地石材による国府系については、新潟県北部から会津方面を経由して関東に製品としてもたらされた（第３図･第４図中の矢印）可能性が高い。

⑷　国府系の機能と性格

先の論考（橋本2017）でも述べたように、横長剥片の生産にはヒンジと脆弱なメクレが付き物である。このことは、西日本からもたらされた国府型ナイフ形石器の素材生産に関わる剥離技術の適用がいかに困難であったかを窺わせる。このようなヒンジ剥片は不用品ともなりかねないが、それにもかかわらず、往々にしてナイフ形石器の素材に供されている。

その好例として、百人町三丁目西例と殿山例がある。

百人町では、このような技術基盤を背景として、国府系のナイフ形石器（第６図２c）が現地生産されている。本例も、先の石核と同様に丹沢系の緑色凝灰岩（報文「細粒砂岩」）が用いられている。技術的には有底横長剥片を素材として、右側縁に整形加工が施されている。先端部は一見欠損であるかのように見えるが、この平坦面は石核の一部が取り込まれたものあり完形品と認識される。底面については、報文では「平坦な２枚の剥離面からなる」との記載があるが、これはバルバースカ―の一部を一つの面としたための誤認であり、底面はひとつの剥離面で構成されている。背面には、剥片生産に先だって同一方向から剥離された、１～２枚の剥離面（同時の可能性有）が見られる。打面は平坦であり、打点が頂点よりもややずれている。刃部は中央部ヒンジでかつその左右がめくれており、刺突具はまだしも切截具としては不適当といわざるを得ない。

また、著名な殿山遺跡の出土例（第２図10a）にしても刃部の大半はヒンジに近く丸味を帯びている。また、それ以外のフェザーエンドを呈する二例（第２図10b・10c）については急角度な刃部となっており、その断面形はナイフ形石器というよりも角錐状石器のそれに近い。このことは国府型ナイフ形石器の機能的互換性を反映しており、切截具というよりもむしろ刺突具を想起させる。

このような研究成果を受けて、国府石器群の刺突具が国府型ナイフ形石器、切截具が翼状剥片という前提に立てば、南関東では、前者が有底横長剥片素材のナイフ形石器もしくは角錐状石器、切截具が横長剥片を基調とした切り出し等の小型のナイフ形石器に置き換わることによって機能的に補完されたものと仮定される。

ただし、必ずしも二者択一の問題ではなく、機能的な併用もあり、柔軟性に富んでいたのかもしれない。特に、技術・形態が便宜的な南関東の国府系を理解するためには、このことに留意する必要がある。

おわりに

鷲谷津遺跡出土のナイフ形石器の資料紹介に加えて関連資料との比較検討を行った。

今回の資料化が今後の研究の一助となれば幸いである。また、本県では県北西部を中心に多くの新資料が続々と発見されており、その成果が群馬県渋川市上白井西伊熊遺跡（大西2010・2011）から、やや停滞気味の当該研究の活性化に多少なりとも寄与できれば幸いである。ただし、紙数の関係で語り尽くせなかったことも多々ある。

特に、注目すべき点として集団の広域移動の問題がある。国府系は、とかく南下傾向にある旧石器時代の石器群の中で西日本から東北日本に向かって北上しており、ひときわ異彩を放っている。特に、その後の関東への二次的な南下の動因が気になるところであるが、この問題に関しては諸説あり、いまだ推測の域を出ない。謎は深まるばかりである。

謝辞

執筆に当たり以下の方々・機関に御指導・御協力を賜りました。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

会田容弘、大場正善、麻柄一志、川端結花、柳田俊雄、門脇秀典、多賀城市埋蔵文化財調査センター、まほろん、静岡県埋蔵文化財センター、豊明市教育委員会、新宿区教育委員会、小平市教育委員会、千葉県立房総のむら（順不同・敬称略）。

注

1）なお、素材については翼状剥片の可能性も考えられるが、縁辺の大部分に整形加工が施されているために確実ではない。

2）これらの資料については、既に紹介済のため詳細は省く（橋本2016・2017）。

3）例えば竹岡俊樹の試算によれば、香川県朱雀台第1地点では、「一個の石核から剥離された翼状剥片の枚数は、3.7枚である。」という。「1,849（ナイフ形石器の総数）+1,526（翼状剥片の総数）÷896（石核の総数）＝3.7枚」

4）なお、これらの資料群には、国府型と同系の直坂Ⅱ型（麻柄1984）の関連資料が含まれている。両者には時間差の問題（国府型→直坂Ⅱ型）はあるものの、石材（安山岩系）と技術面（石核の素材が大型剥片）において互いに密接な関係があり、かつ分布域も重なることから、ここでは便宜的に同系とみなした。

5）このほか零細ではあるが、有底横長剥片３点の接合例として松戸市彦八山遺跡がある（第２図14）。黒色頁岩製であり、垂直割れを伴う14aの底面には半円形のバルブの膨らみがみられる。このことから石核の素材が剥片であり、その小口（剥片の平坦打面）を作業面としていることは明白である。

6）石材は丹沢系の緑色凝灰岩（報文「凝灰岩」）。剥離の手順は①→②→③→④→⑤→⑥であるが、③→④の新旧関係は他の剥離面によって隔てられているため不確定である。

7）瀬戸内技法の影響による技術的な変異については、かつて松藤和人が、「瀬戸内技法を有する集団との接触・交流によって触発された結果」という作業仮説を提示しており、同時に「そうした接触を示す具体的な証拠として、殿山遺跡の国府型ナイフ」を挙げている。南関東の現状に照らし合わせれば至極妥当な見解といえよう（松藤1987）。

引用・参考文献

会田容弘　1994「東日本の「国府系石器群」を中心とする石器群の石器組成比較」『瀬戸内技法とその時代』 pp.153-162 中・四国旧石器文化談話会

阿部朝衛　2013「半透明の頁岩」『石器石材のつどい　第2回シンポジウム「富山の石材と玉髄・碧玉」予稿集』 pp.21-24　石器石材のつどい

雨宮龍太郎・落合章雄　1998『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ－白井町一本桜南遺跡－』千葉県文化財センター

有本雅己　2004「百人町三丁目西遺跡の瀬戸内技法関係資料について」『石器に学ぶ』第７号　pp.69-78　石器に学ぶ会

安斎正人　2004「東北日本における「国府系石器群」の展開」『考古学』２　pp.1-40　安斎正人編

石田守一　1979『鹿島前遺跡第２次発掘調査概報』 我孫子市教育委員会

井関文明　2005「東日本の国府系ナイフ形石器（1）」『神奈川考古』第41号　pp.1-6　神奈川考古同人会

井関文明　2009「東日本の国府系ナイフ形石器（２）」『神奈川考古』第45号　pp.1-24　神奈川考古同人会

太田文雄・矢本節朗　1992『横芝町上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡』千葉県文化財センター

大西雅広　2010『上白井西伊熊遺跡―旧石器時代編―』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

大西雅広　2011「群馬県上白井西伊熊遺跡における瀬戸内技法」『旧石器考古学』74　pp.29-40　旧石器文化談話会

織笠昭　1987「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4 pp.1-38　日本考古学会

角張淳一　1989「武蔵野台地の横剥ぎ技法－研究ノート－」『佐久考古通信』№49 pp.3-10　佐久考古学会

門脇秀典ほか　2017『常磐自動車道遺跡調査報告73』 福島県文化振興財団

香取正彦・榊原弘二・新田浩三　2006『船橋市源七山遺跡』千葉県教育振興財団

菊池真太郎ほか　1979『千葉市城の腰遺跡―千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告３―（千葉市大宮地区）』 千葉県文化財センター

齋藤基生　2002「勅使池遺跡」『愛知県史　資料編１　考古１旧石器・縄文』p.178　愛知県史編さん委員会

笹原千賀子　2009『梅ノ木沢遺跡Ⅱ（旧石器時代編）　第二東名№143-2　CR35地点』 静岡県埋蔵文化財研究所

佐藤禎宏・大川貴弘　2003『八森遺跡　先史編・先史図録編』山形県八幡町教育委員会

佐藤良二　1995「静岡県匂坂中遺跡群における瀬戸内技法小考」『旧石器考古学』50　pp.16-22　旧石器文化談話会

柴田徹　2002「愛鷹山麓出土石器の石材鑑定―ホルンフェルス（頁岩）の偏光顕微鏡下の観察から―」『西洞遺跡（c・d区）発掘調査報告書』 pp.215-2232　沼津市教育委員会

柴田徹　2004「殿山遺跡より出土した石材に関する考察」『殿山遺跡　先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書』pp.283-299　上尾市教育委員会

白井久美子ほか　2002『千葉市鷲谷津遺跡　千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 千葉県文化財センター

白井久美子ほか　2006『東南部ニュータウン35　千葉市椎名崎古墳群Ｂ支群』 千葉県教育振興財団

鈴木定明　1978「白井第一遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』 pp.219-294　千葉県文化財センター

関口博幸　2008「後期旧石器時代における前橋泥流をめぐる遺跡形成史」『岩宿フォーラム2008／シンポジウム　更新世の地形発達史と遺跡群の形成　予稿集』 pp.36-43　岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

竹岡俊樹　1980「瀬戸内技法再考」『どるめん』26　pp.21-37　JICC出版局
田島新　2010『千原台ニュータウンＸＸⅣ―市原市鶴牧遺跡（下層）―』　千葉県教育振興財団
谷川章雄ほか　2001『東京都新宿区百人町三丁目西遺跡Ⅳ』　新宿区淀橋市場遺跡調査団
田村隆・小林清隆　1987『松戸市彦八山遺跡』千葉県文化財センター
千葉県教育振興財団　2018『平成30年度出土遺物公開事業　千葉寺地区の遺跡展　展示解説図録』
千葉孝弥ほか　2004『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ―』　多賀城市教育委員会
立木宏明ほか　1996『樽口遺跡』　朝日村教育委員会
堤隆編　1997『柏ケ谷長ヲサ遺跡』　柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団
中村由克　2004「神子柴系石器群の石材利用」『長野県考古学会誌』107号　pp.19-22　長野県考古学会
中村由克　2008「３　石器石材の原産地の推定」『上ノ原遺跡（第５次・県道地点）発掘調査報告書』pp.216-231　信濃町教育委員会。
中村由克　2011「旧石器時代北陸の石材環境」『考古学ジャーナル』610　pp.7-10　ニューサイエンス社
西川博孝ほか　2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15―柏市小山台遺跡Ｂ区―縄文時代以降編　第1分冊』　千葉県教育振興財団
新田浩三　2015『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書８―柏市富士見遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡―　旧石器時代編』　千葉県教育振興財団
新田浩三ほか　2018『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書13―柏市矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・花前Ⅰ遺跡・花前Ⅲ遺跡・寺下前遺跡・大松遺跡・小山台遺跡・八反目台遺跡・館林Ⅱ遺跡―』　千葉県教育振興財団
橋本勝雄　1983「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について―第２・３層を中心として―」『考古学論叢』Ⅰ　pp.105-135　芹沢長介先生還暦記念会論文集刊行会　東出版寧楽社
橋本勝雄　2012「北方系細石刃石器群の研究」『シンポジウム北関東地方の細石刃文化　予稿集』　pp.2-12　岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
橋本勝雄　2016「柏北部東地区出土の旧石器・縄文時代の石器３例―木葉形薄型尖頭器・大型尖頭器・国府型ナイフ形石器の紹介と関連資料の検討―」『研究連絡誌』第77号　pp.1-9　千葉県教育振興財団
橋本勝雄　2017「東日本における国府系石器群の地域的様相―関東地方を中心として―」『考古学ジャーナル』698　pp.10-14　ニューサイエンス社
羽石智治・会田容弘・須藤隆編　2004『最上川流域の後期旧石器文化の研究１　上ミ野遺跡第1・２次発掘調査報告書』　東北大学大学院文学研究科考古学研究室
比毛君男ほか　2004『北西原遺跡（第３次・第４次調査）　山川古墳群（第１次調査）』　土浦市遺跡調査会
平口哲夫　1987「横剥ぎ技法の諸類型(1)」『太平臺史窓』6　pp.1-12　大塚書店
平口哲夫・松井政信・樫田誠　1984「福井県三国町西下向遺跡の横剥ぎ技法」『旧石器考古学』第28号　pp.5-18　旧石器文化談話会。
平口哲夫　1988「横剥ぎ技法の諸類型(2)」『太平臺史窓』7　pp.1-18　大塚書店
平口哲夫　1989「横剥ぎ技法の諸類型(3)」『太平臺史窓』8　pp.45-63 大塚書店
古田幹　1988『泉水山・下ノ原遺跡Ⅲ』　朝霞市泉水山・下ノ原遺跡調査会
麻柄一志　1984「日本海沿岸地域における瀬戸内系石器群」『旧石器考古学』28　pp.19-35　旧石器文化談話会
麻柄一志　2011「中部地方の瀬戸内系石器群」『旧石器考古学』74　pp.41-48　旧石器文化談話会
麻柄一志　2017「日本海側の地域―国府石器群の成立と展開―」『考古学ジャーナル』698　pp.5-9　ニューサイエンス社
松藤和人　1987「“殿山技法”は成立するか？」『旧石器考古学』第35号　pp.69-80　旧石器文化談話会
村山好文ほか　1985『平賀』平賀遺跡群発掘調査会
森先一貴　2011「国府系石器群の多様性」『旧石器考古学』74　pp.49-59　旧石器文化談話会
山内幹夫ほか　1992『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡発掘調査報告32　弥明遺跡』　福島県教育委員会
森先一貴　2011「国府系石器群の多様性」『旧石器考古学』74　pp.49-59　旧石器文化談話会
柳田俊雄・藤原妃敏　1981「瀬戸内技法と石刃技法―調整技術のもつ意味―」『旧石器考古学』23　pp.29-40　旧石器文化談話会